



総務省自治行政局行政課課長補佐
兼任2040戦略室

光永 祐子 Yuko MITSUNAGA

平成 18年 4月 総務省採用
同 自治財政局調整課
8月 岡山県企画振興部市町村課
平成 20年 4月 総務省消防庁消防・救急課
平成 21年 8月 日本銀行金融市場局
平成 22年 8月 総務省自治行政局地域自立応援課
平成 23年 7月 秋田県企画振興部総合政策課政策監
平成 24年 4月 同 企画振興部学術国際局国際課長
平成 25年 4月 同 企画振興部市町村課長
平成 26年 4月 同 総務部財政課長
平成 28年 4月 総務省大臣官房企画課課長補佐
8月 同 大臣政務官秘書官
平成 29年 8月 同 消防庁国民保護・防災部防災課災害対策官
平成 30年 7月 現職



秘書官時代にお支えた政務官と(筆者右端)

みんなちがって、
みんないい。

■ これからの国のかたち

日本の人口は2008年をピークに減少に転じましたが、高齢者人口は増え続け、団塊ジュニア世代がすべて高齢者となる2042年にピークを迎えるものと推計されています。これまでに経験したことのない、本格的な人口減少・少子高齢社会の到来です。2040年頃、これから約20年先の日本は、一体どんな姿になっているのでしょうか。全国どこでも、医療、福祉、教育、インフラの維持管理といった各種行政サービスが持続的かつ安定的に提供され、私たちの家族や友人、知人が皆、心豊かに暮らすことはできているのでしょうか。

現在、全国各地で、まさに地域の生き残りを賭け、地方創生の取組が進められていますが、どこに住んでいても、必要な行政サービスを享受でき、安心して暮らしていけるようであれば、将来世代に対し、多彩な地域が共存する魅力あふれる国土を引き継いでいくことはできません。

2040年頃にかけて人口減少・少子高齢化が深刻化することが確実に見込まれる中で、日本は今、これまでの人口増加が前提の制度を、将来の人口構成に合わせて大きく見直すべき時期にきています。将来の人口減少社会でも、各地域における多様な

自治を実現するためには、どのような地方行政体制が必要となるのか。内閣総理大臣の諮問機関である地方制度調査会において、時代を先取りした議論が進められています。そうした最前線の議論に日々触れながら、これからの「国のかたち」を考えることのできる現職は、刺激とやりがいにも満ちあふれています。

■ 十人十色のキャリアステップ

自治体の姿も多様ですが、総務省職員のキャリアステップも負けてはいません。

私自身は、入省直後の岡山県のほか、入省6年目からは管理職として秋田県へと、2回の地方勤務を経験しています。日本全体を俯瞰して、必要な制度を構築するのが国の仕事だとすれば、地方勤務は、そうして作られた制度をどのように運用するのがその地域の住民(自分自身も含め)にとって望ましいのか、考えながら実践する場です。制度を作るダイナミックな仕事だけでなく、実際に制度を運用する行政の現場に触れられるのは、地方勤務の醍醐味です。何より、東京育ちの私にとって、この2つの土地は、ふるさととも言えるような大切な場所であり、今でも折に触れて「帰る」、そんな場所です。

地方勤務以外にも、日本銀行への出向

や、政務官秘書官のほか、災害対策官として災害現場にも派遣されるなど、総務省内外を通じて、男性と分け隔てなく、色々な経験をさせてもらっていますが、それは私だけに限りません。誰もが国内外の多様なポストで活躍の場を与えられ、唯一無二の経験を積んでいるからこそ、制度の企画立案に当たっては、皆の知見を突き合わせて、様々な角度から現場目線で説得力ある議論ができる。それこそが総務省の強みです。

自治体も総務省職員も、みんなちがって、みんないい。1,700以上ある自治体に負けないぐらい個性豊かで頼もしい上司や同僚に囲まれながら、時代に即した「国のかたち」を考える毎日を送っています。そんな総務省で一緒に日本の未来を描いてみませんか。



休日のトレッキング(筆者左)

2015年初夏、大歓声が渦巻く中、喜びを爆発させた踊り子達の中に私はいました。高知県の「よさこい祭り」をルーツに、よさこい祭りの「鳴子」と北海道の民謡「ソーラン節」をミックスして誕生し、今ではすっかり札幌に初夏を告げる風物詩となっているYOSAKOIソーラン祭り。総務省に入省後、北海道に赴任していた私は、心奪われ、一人の踊り子となっていました。

■ 何者でもない

100名以上の踊り子の魅せる演舞は、一つの芸術ともいえるべき表現力や一体感を持っています。完成までの過程は、振り返れば、私に充実感と並ぶ貴重な視座をもたらしました。知るべもなく、遠い地から突然現れた、それこそ「何者」でもない自分が、出自も年代も全く異なる組織に属し、時に熱い想いをぶつけ合いながら、踊りをとおして関係を構築し、大賞という唯一の目標を目指すこと。この体験は狭隘で凝り固まった価値観から私を解放しました。

異なる環境に身を置く機会があったとしても、バックグラウンド、組織の機能、組織内での役割などの形式的な要素により共有されるコンテキストの中では決して触れ得ぬ経験を積ませていただいたことに本当に感謝しています。

同時に、この純粋な感情湧き上がる体験を通して見せつけられる形となった、人の持つ「想い」の強さや「想い」がチームの力へと昇華した際の可能性の広がりには、鳥肌が立つほど感動をしました。

地方自治とは、住民の意識という海に浮かぶ船だとすれば、この潮の流れである住民の意識(「想い」)は、主体的に地域の一員として参加していくことで初めて垣間見

えてくるものなのかもしれません。

■ 「想い」

「想い」の実現、例えば地域ごとの独自の取組の実施には、住民が生活を安心して営めるという前提が必要です。安心を一番身近で保証しているのが、地方自治体の提供する行政サービスであり、その行政サービスを日本全国で一定の水準で享受できるよう、「地方行政」「地方財政」「地方税政」に代表されるインターフェースを設計し、地方自治体の行財政運用をサポートするのが総務省の役割です。

私の担当は「地方財政」であり、地方公共団体の歳入の中で重要な役割を担う地方債の制度設計・運用をしています。

地方債は財政投融资改革等を契機に、市場化が進展し、社会的正義の実現が期待される政策・制度とは異なる動きをする金融市場と接しているところが大きな特徴です。完全な市場化が「あるべき姿」という見方も踏まえながら、市場のルールと財政制度のルールに折り合いがつけられています。

私自身、制度の運用にあたり、本を読んだ程度程度の知識をもとに構築した理屈や抽象的概念から青臭い理想を掲げ、時に現行の制度に反発を覚えることも事実ですが、経験を積み、現場の実情や制度の本源的な意義を理解する過程で、激しく議論を重ね、困難な課題に対応しながら制度を歴史的に発展させてきた偉大な先人たちの「想い」に触れることができることに奥深さも感じています。

地方の「想い」と国の「想い」、直接的につながることはありませんが、多くの「想い」を垣間見る体験を積み重ねること、自分の中に複合的・重層的なパロメー

タが刷り込まれていくような感覚があります。そして、このミクロの気づきが、新たなアングルを提供するのであり、いくら形式的に環境が用意されていようと正しいアングルを得られなければ、体験に価値は生まれないような気がしています。

■ 未来は手の中に

人口動態をはじめ、社会の大きな変化からは誰も逃れられず、あらゆる動きが重層的に重なりあい、特定分野の知見だけでは未来予測ができなくなっています。この予測不能の時代においては、既存の制度を前提に価値を再分配するのではなく、現代社会に対応した戦略として、既存の制度のアップデートや新たな制度の構築が必要です。これを踏まえると、総務省の職員に求められているのは、先人たちの知恵と想いを受け継ぎ、社会の変化と競い合いつつ、公益という理念を実践との往復の中で具体的な形に創り上げていくことだと思いますが、そこで何をやるべきか、どんな未来を目指すかは、結局のところ自分の「想い」次第であると私は考えています。

「今」という瞬間は、私たちにとって一番若い時であり、時代の最先端です。これからの時代を創れる立場にあるのは「今」しかありません。この冊子を手にとった皆様を含め私たちに、時代を創る責任があると思っています。

私も役割を全うしていきますが、もし皆様と共に「想い」という羅針盤を手に入れたら、次の時代を創っていくことができたら、幸いです。



YOSAKOIソーラン祭りにて

「想い」



総務省自治財政局地方債課

西井 大翔 Taisyo NISHII

平成 26年 4月 総務省採用
同 自治財政局財政課
8月 北海道総合政策部地域行政局市町村課
平成 27年10月 総務省大臣官房企画課
平成 29年 4月 現職